# 自分と家族の人生相談
## ―読売新聞「人生案内」欄を資料として―

池田　知加[i]

本論文は人々がどのようなことに悩み，どのような生き方を理想としているのか，またそれらは社会の変化にともなってどのように変化しているのかについて，読売新聞「人生案内」欄の人生相談を分析資料として考察する。家族関係についての悩みが減少し，自分についての悩みが増加していることをU.ベックの「個人化」概念に基づいてその意味を詳細に分析すると，一見して「家族の個人化」とみえるこの変化は夫婦関係の悩みが減少していることから派生しているとわかる。親子関係についての悩みと回答からは個人化しえない経済的な扶養関係にある親子の姿が浮かび上がってくる。その背景にあるのが現実社会の少子高齢化である。その現実社会の高齢化は人生相談の相談者の高齢化にもあらわれている。介護についての悩みが増加し続け，これまでになかった人生の後半になってからの親密な関係についての悩みもみられるようになっている。それは，家族以外の対人関係を拡大していかざるをえない厳しい現実の反映でもあるが，新たな社会関係を広げていくチャンスにもなりえる。

**キーワード**：人生相談，読売新聞「人生案内」，少子高齢化，家族の個人化，夫婦関係，親子関係，親密な関係

### はじめに

かつて「当たり前」とされていたライフコースが誰にでも通用するものではなくなったり，容易に維持できるものではなくなったりしている現在において，人々の生き方や個々人が直面する問題は変化しているのではないか。本論文では，家族関係の悩みや自身の性格や行動，進路など日常生活において誰もが遭遇しそうな悩み事の変化とその社会背景について考察する。そこで，一般の人々がどのようなことに悩み，何を問題とみなしてきたか，またそれらの悩みや問題に対して，どのような助言や解決策が示されてきたかについて分析する。その資料として，読売新聞紙上において長期間にわたって掲載されている「人生相談」コラムをとりあげる。

人生相談は職業的な作家や著名人が抱える独特な悩みや葛藤とそれらを乗り越える方策が述べられるような「人生論」の類と異なり，一般の人々が日常生活において直面している悩み事を相談し，回答者がその悩みに答えるという相談と助言のコミュニケーションである。そこで人生相談における相談と回答というコミュニケーションに着目すると，相談者の悩み事の内容だけでなく，相談者の悩みに対する回答者の助言から，さまざまな問題が解消されたよりよい生き方の内実についても理解することができる。なぜなら，本論文で分析資料とした新聞に掲載された人生相談における回答者たちは，相談者の悩

i　立命館大学非常勤講師

み事に答えるなかで，相談者だけでなく，広く一般読者も想定しながら，説得力のあるよりよい生き方を提示するからである。この相談と回答のやりとりから何が問題と認識されているのか，何が理想の生き方とされているのかといった人々の認識や価値意識とそれらの変化が浮かび上がってくる。

1では，分析資料としての「人生相談」について概観したうえで，家族についての悩みが減少し，自分自身についての悩みが増加しているという悩み事の変化について明らかにする。

2では，家族から自分自身へと人生の重要問題がシフトしていることは，家族関係が重視されなくなっていることを意味しているのかについて，家族についての悩みとそれらに対する回答内容にも注目しながら考察する。

3では，高齢化にともなう深刻な介護問題などの悩みをふまえて，今後の「人生案内」欄にどのような相談が寄せられるかも合わせて考察することで，家族以外の対人関係を拡大することが重要になっていることを明らかにする。

## 1　現代における人生問題：自分自身についての悩みの増加

### (1) 社会の変化と生き方の変容

およそ1990年代ころより近代社会が変化した現代社会について，たとえば，U. ベック（Ulrich Beck）は「第二の近代」ないし「リスク社会」（1986, Beck et al., 1994），A. ギデンズ（Anthony Giddens）は「ハイ・モダニティ」ないし「後期近代」（1991a, Beck et al., 1994），Z. バウマン（Zygmunt Bauman）は「リキッド・モダニティ」（2000）といった概念で論じている。いずれも，近代社会の構造転換とともに，人々の認識や行為が変化し，「どのように生きるべきか」が個々人にとって重要な課題になっていることが強調されている。

とりわけ，バウマンは近代化の新たな段階として現代を「リキッド・モダン」と表現し，人々の生活が不安定になり，いかに大きな不安がつきまとうかについて論じている（Bauman 2000, 2005）。バウマンが強調するのは，「指針，道案内となる形式，法規，規則」が不足している「リキッド・モダン」状況のもとでの「リキッド・ライフ」である。それは，固定化することのない「液体（リキッド）」と形容されているように，「不安的な生活であり，たえまない不確実性の中で生きること」を意味している。そのような状況において人々は選択の可能性が開かれてはいるものの確信をもって行為を選択することが困難になった結果，「気苦労が絶えず，強い不安」がつきまとう人生を自分自身の責任としてひきうけていかなければならない（Bauman 2005: 2＝2008: 8）。

このように，近代という社会構造の転換は個々人の認識や行為と密接にかかわり，どのような自分になるかという自己アイデンティティの構築，結婚や離婚にまつわる悩み事など個人的な問題とされる領域に社会の転換が顕在化するとみなされているのである。

日本社会においても，バブル崩壊後の1990年代から社会経済構造の転換にともなって戦後日本社会で広くみられた「標準的なライフコース」が維持できなくなり，人々の生き方もまた大きく変容していると論じられている。

たとえば，落合恵美子によれば，ベックのいう「第2の近代」は出生率の低下と「脱主婦化」という家族変動と並行して生じている（落合 2014）。また，山田昌弘は1990年代頃より，「ポスト工業経済」という新しい経済状況の出現が1970～1980年代にピークであった「近代家族の経済基盤」を掘り崩し，女性の「雇用労働者」化と同時に男性の正規「雇用の不安定化」が進展することで，性別役割規範に従った「近代家族を形成したくても不可能な人」が増えていると指摘している（山田 2014）。

1990年代以降，変化したのは家族のあり方だけではない。バブル経済が崩壊し，家族を形成するための収入を得る仕事の領域においても非正規雇用率が増大するなど大きく変化している。新卒一括採用を

通してほとんどの男性が正社員となり，長期に渡って安定的に雇用され，年功制の賃金制度が維持されていれば，家族の生活は安定し，また女性は家事と育児に専念し，子どもの教育に熱心に取り組むことができた。しかし，バブル経済の崩壊後，非正規雇用者比率の増加とともに，未婚率は急激に上昇し，かつてのようなライフコースは望むと望まざるとにかかわらず，誰もが到達できる「標準コース」ではなくなった。

このように日本社会が1990年代頃より大きく変化するにともなって，人々の悩み方はどのように変化したのだろうか。バウマンは不安定な生活における人々の「気苦労」や「不安」を強調し，ギデンズは「個人的な問題や心配事」について論じている（Giddens 1991b）が，人々はいったい何に「気苦労」や「不安」を感じ，どういった問題を抱え，何について「心配」しているのだろうか。本論文で明らかにしたいのは，人々の不安や心配事の具体的な内容と社会構造の転換にともなうそれらの変化である。

### (2) 分析資料の概観

社会の変化にともなう人びとの不安や悩みの内実とその変化を把握するための資料として，読売新聞の人生相談コラム「人生案内」に掲載された相談と回答を用いる。「人生案内」は1914年に「よみうり婦人付録」（現「くらし家庭面」）において「身の上相談」として始まり，日中戦争時の1937年に中断したが戦後1949年に再開し，2017年現在においても継続している長期に渡るコラムであり，人々の悩み事の変化や日常生活において何が問題とみなされてきたかについての変化を分析するのに適している。

「人生案内」欄に掲載された悩み事の相談者の性別，年齢分布をみると，女性が多数を占め，相談者の年齢分布は時期によって偏りがあるため，統計学的な調査で用いられるような「代表性」を得ることはできない。しかし，悩みが生じたコンテクストや相談者をとりまく人間関係について記述されており，必ずしも，相談者のほとんどを占める女性やある年齢層に固有の問題だけが明らかになるわけではない。

また，本論文で分析資料とする「人生相談」は新聞に掲載されたものであり，インタビューや参与観察による調査対象者との直接的なコミュニケーションで得られた一次的な情報ではない。新聞社によって選別・編集された二次的な性格をもつため，相談内容が事実に基づいていないのではないか，脚色があるのではないかといった分析資料としての客観性や信用性の問題を内包している。しかし，本論文では相談者による創作や脚色の可能性については問わない。

本論文で分析の焦点を当てるのは，相談者の「悩み事」が事実かどうかという事実レベルではなく，特定の時代状況においてどのような悩みが人生問題と認識されているか，どのような価値意識や理想的な生き方が前提となって悩みや問題が生じるのかといった認識レベルである。そこで相談内容だけでなく，回答にも注目することで，両者のやりとりから何が悩みや問題と認識され，それらが解消された理想的な生き方はどのようなものかが明らかとなってくる。したがって，たとえ事実ではない相談であったとしても，そこには何らかの生活上の問題が提示され，またそうした問題に対する解決方法や助言が提示されている限り，分析の着眼点からみて「人生相談」は分析資料として有効だと考える。

さらに，編集の問題については，一般の読者に向けて「読みもの」となるべく相談内容が選別されているといえるが，逆に，広い読者が想定されていることが本論の分析資料として利点となりえる。なぜなら，新聞という媒体の性質上，読者の存在が意識されているため，その個別性よりも多くの読者にも身に覚えがある相談と，読者も妥当だと思われる一般性の高い回答が提示されているからである。そうした観点からすると，「人生相談」はある回答者の特定の見解や相談者の個別的な問題ではなく，広く共有される人生上の問題や望ましい生き方などを明らかにする資料だといえる。

そこで，従来のライフコースが確立された1960年

**表１　分析資料一覧**

| 掲載年 | 相談件数（性別） |
|---|---|
| 1968年 | 317（男性54，女性263） |
| 1978年 | 299（男性32，女性265） |
| 1988年 | 301（男性39，女性262） |
| 1998年 | 306（男性35，女性271） |
| 2003年 | 297（男性28，女性269） |
| 2008年 | 352（男性42，女性310） |
| 2013年 | 354（男性56，女性298） |
| 2014年 | 356（男性51，女性305） |
| 2015年 | 355（男性52，女性303） |

代から2010年代までの「人生案内」欄に掲載された相談と悩みを収集した（表１）。悩み事の長期的な傾向をとらえるために1968年から10年ごとの1978年，1988年，1998年，2008年と，とくに2000年代から現在までの悩み事の変化をみるために2003年，2013年，2014年，2015年のそれぞれ一年間の相談と回答を分析する[1)]。

### (3) 自己自身についての悩みの増加

人は日々の生活において，どのようなことに悩んでいるのか，そして，その悩みの内容は変化しているのかについてみるために，1960年代末から2010年代半ばまでの「人生案内」に掲載された悩み事の相談内容を分類した。夫婦関係，親子関係，兄弟姉妹，祖父母，親類など家族関係から生じる悩み（①家族），職場や学校などフォーマルな場における悩み（②職場・学校），友人関係や恋愛関係などインフォーマルな関係から生じる悩み（③親密圏），町内会や近隣住民などの関係から生じる悩み（④近隣），一般的な他者に対する不満など，上記以外のその他の他者についての悩み（⑤その他），最後に，他者との関係から生じるのではない，自身の性格や容姿など自己自身についての悩み（⑥自己自身）の６つに分類し，相談内容をふるいわけた。

悩み事内容の推移（図１）をみると，夫婦関係や親子関係など，家族関係についての悩みがどの時点

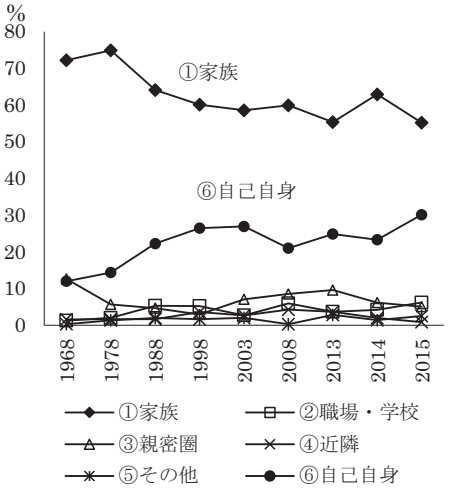


**図１　悩み事内容の推移**

においても最も多くを占めている。そこから，「生活上の悩み全般」という投稿規定[2)]があるものの「人生案内」は基本的に女性からよせられた家族関係についての悩みが語られる場として機能しているといえる。しかしながら，家族関係から生じる悩みは1978年をピークに減少傾向にあり，かわって，自己自身についての悩みが大きく増加している。

ここで自己自身についての悩みとして分類した相談は，「17歳の女子高校生〔…省略…（以下…のみ）〕私はいつもウジウジしていて気が小さいことが悩み」（2014. 11. 08），「20代後半の男子大学院生〔…〕僕は温室で育ったいわゆるボンボンなので〔…〕ハングリー精神があまりない」（2014. 09. 20）など自分の性格に悩んでいるものや，「15歳の女子高生。恋をしました。同級生でも先輩でも後輩でもなく，30歳以上も年上の男の先生〔…〕この恋心を抱いてどう過ごすべきでしょう」（2014. 07. 12）と，不安や寂しさなど自分の感情をうまく処理できないというような悩みである。

このような進路や自分の性格など自己自身についての相談は，従来10代や20代に多かったのが，2000年代頃から，30代から60代以上の高齢者にもみられるようになっている（図２）。つまり，どんな進路

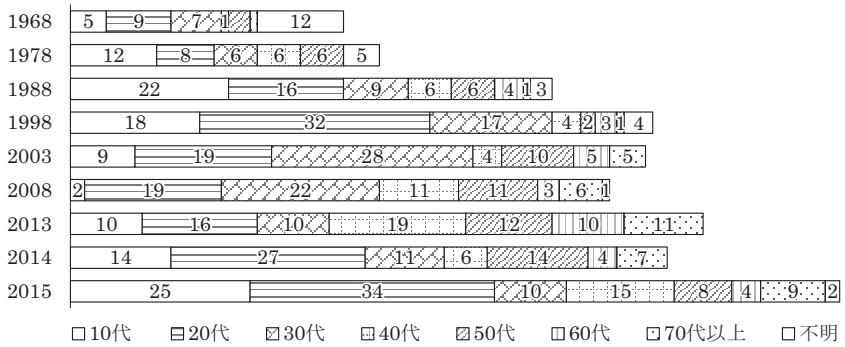


**図２　年齢別自己自身の悩み相談件数の推移**

を選択し，どのような人生を歩み，どのような自分になるのかといった課題は，現在，ある一定の年齢に特有のものではなくなり，人生の長期間にわたって，「自分」が重要な問題になっているといえる。

さらに，自己自身の悩みとして分類した相談は周囲の人間関係において軋轢があったり，特定の他者との関係から派生したりと思われるような問題であっても，他者との関係としてその問題を位置づけるのではなく，自分自身の性格や感情の問題として理解しているといった特徴がある。

> 20代のフリーター女性。就職環境の悪さに怒りと諦め〔…〕私は今年の春に契約社員として入った会社でパワハラを受け，３か月で退職しました。１年の勤務で正社員になれるはずでしたが，後悔はしていません〔…〕退職して間もなく，父から「小遣いなんてやらんからな」と嘲笑されたことが胸に刺さりました。就職で苦労することなく順調に昇給してきた父に，私の状況を理解してもらうのは無理〔…〕順調に社会人として歩んでいる同級生をみると，劣等感とぶつけようのない怒りがこみ上げてきます。一方，私と同じような境遇の友人も多く，社会への失望で胸が苦しくなります〔…〕前に進んで行くにはどうしたらいいでしょうか。（2014. 12. 11）

この相談者の悩みには，まず「契約社員として入った会社」での「パワハラ」によって退職を余儀なくされた「就職環境の悪さ」に対する怒りと諦めという問題がある。さらに，「フリーター」であることを「就職で苦労することなく順調に昇給してきた父」に「嘲笑」されたことに対する失望がある。しかしながら，相談者が問いかけているのは，「就職環境の悪さ」やその環境を理解しようとしない「父」についてではなく，怒りや失望を抱えた自分が「前に進んでいく」ための方策である。「前に進んで行くにはどうしたらいいでしょうか」という問いは，端的に自分の進むべき道がわからないという悩みを解決するための方策や心構えについての問いである。そこでこの相談を職場といったフォーマルな場で生じる問題や家族関係の悩みとせずに，自己自身の悩みとしてカウントした。

この相談にみられるように，自己自身の悩みとして分類した相談の中には，家族をはじめとした他者との関係や職場から問題が生じ，それに対する怒りや失望があったとしても，自分自身の進むべき道がわからない，自分の感情をコントロールできないなどと，自己の内部の課題としてとらえようとするものが多い。

なぜ，周囲の出来事から独立したものとして，問題を自分自身の課題としてとらえるような悩み方が増加したのだろうか。自己自身についての悩み相談が増加したのが1980年代末からであり，1998年と2003年が特に多く掲載されている。ちょうどこの時期に，日本社会は第二の近代として，社会構造が大

きく転換し，従来の「標準的なライフコース」が誰にでもあてはまる普遍的なものではなくなりつつあった。つまり，これまで当たり前とされてきた生き方が参考にならなくなり，自分はどのような生き方をするのか，どのような自分になるのかについて自分で答えを見つけ出さねばならなくなったのである。

このように，家族間の悩みではなく，「個人の悩み」や「心の持ちよう」を聞く相談が増加していることをうけて，家族についての悩み相談が中心であった「人生案内」が「個人の問題を答える場へと変化してきた。日本人の脱家族化を反映しているといえる」と太郎丸博[3)]は指摘している（読売新聞2014. 05. 08朝刊19面）。

「家族の問題」よりも「個人の問題」へという人生問題の変化は，ベックのいう「個人化」と解釈することができそうである。「自分自身」についての悩みとは，周囲の対人関係や社会的な環境において，問題に遭遇したり，困難を感じていたりしても，自己の課題として，出来事をとらえていくという特徴があった。つまり，ベックの言葉でいうと，「個々人は自分自身の人生行路や能力や立場の認識やパートナーシップ等の関連において，自分自身をその行為の中心として，設計事務所としてとらえることを学ばなくてはならない」のである（Beck 1986：217＝1998：267）。

さらに，ベックによれば，「自分自身」が「行為の中心」として，人生をつくりあげ，「社会」を一つの「変数」として扱う「自我中心的な世界像」を展開しながら，人生をつくりあげていく「個人化」は，家族にまで拡大しているという。伝統的な結びつきや扶助関係から解放され，「誰もが，その時々の人生の段階に拘束された家族生活を送り，そしてまた家族から自由な形態の生活を送るようになり，ますます自分自身の人生をすごす」（Beck 1986：188-189＝1996：231）。

では，自分自身についての悩みが増加していることは，「家族の個人化」や「脱家族化」を意味しているのだろうか。言葉をかえていうと，自分中心の人生を重視することは，親子・夫婦関係といった家族関係が重視されなくなっていることを意味しているのだろうか。次節では家族関係の悩みを分析しながら，家族についての悩みの減少の内実について検討してみよう。

## 2　家族関係の悩み：個人化の諸相

### (1) 家族の価値

家族よりも自分中心の人生を重視し，自己自身の問題が増加していることから，「脱家族化」や「家族の個人化」が生じているといった議論とは異なり，いくつかの意識調査によると，人々の家族に対する価値はきわめて高い。

たとえば，統計数理研究所「国民性調査」によると「あなたにとって一番大切と思うものはなんですか」という問いに対して，「家族」と回答した人が最も多く（44%），次に「生命・健康・自分」（18%），「愛情・精神」（18%）となっている。1960年代までは「生命・健康・自分」を重要とする比率が高かったのが，1983年の調査以降は，「家族」と答える割合が最も多くなっている（中村，土屋，前田）。すなわち，標準的な家族形態が維持されなくなるにつれて，逆に，「家族」に対する思い入れやその価値が高くなってきているのである。

しかし，同調査によると，「子供がないときは，たとえ血のつながりがない他人の子供でも，養子にもらって家をつがせた方がよいと思いますか，それとも，つがせる必要はないと思いますか」という問いに対して，「つがせる」とする答えは1950年代において７割を超えていたのが，2010年代においては２割程度にまで減少している（同上）。つまり，多くの人にとって，価値があるのは「家族」という関係そのものであって，「家の存続」ではないのである。

このように，継続してきわめて高い価値がおかれる「家族」であるが，それはどのような形態の家族なのだろうか。NHK 放送文化研究所（2015）「日本人の意識」調査によると，「家庭内協力」型（1973年

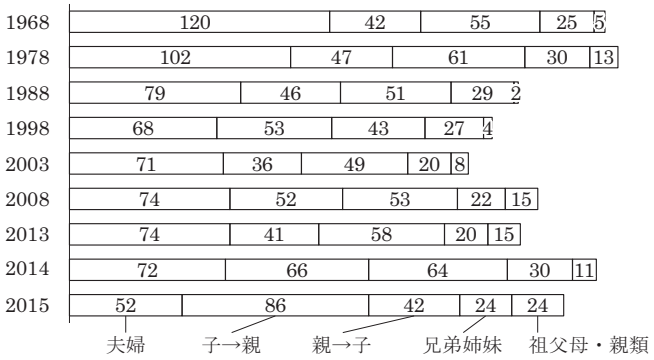


**図３　家族についての悩み　関係別相談件数**

21.2％から2013年48.0％）が理想の家庭像として最も支持されるようになり，1970年代に多数派を占めていた「役割分担」型（1973年39.2％から2013年14.9％）と「夫唱婦随」型（1973年21.9％から2013年10.3％）は減少し，それらの形態の家族を理想とする比率は低くなっている。

さらに，「結婚した女性が職業をもつこと」について，かつては「家庭」と「育児」を優先するという意識が高かったのが，1990年代末以降，「両立」がもっとも支持されるようになっている[4)]。

これらの意識調査からみえてくるのは，封建的なイエや夫婦関係はもちろんのこと，性役割意識からも離れて，民主的で対等な家族を理想視するという人々の意識である。つまり，「個人化」の家族への拡大と家族を重視するという意識が並行して増加しているのである。一見すると矛盾しているようにみえるが，そうではなく，自己中心的にどのような生き方をするかを決定していくことは対等で民主的な家族を形成していくことを内包しているといえる。

「人生案内」に掲載された悩み事の変化をみても，確かに家族についての相談は減少しているが，最も多くよせられる悩みのテーマは一貫して家族である。その家族についての悩みを関係ごとに分類してみると，減少しているのは夫婦関係についての悩みであって，親子関係の悩みや祖父母と孫の関係，親類関係における悩みは減少していない（図３）。

一見して，「脱家族化」ないし「家族の個人化」とみえる家族の悩みの減少は，夫婦関係についての悩みが減少していることから生じている。それは夫婦関係に対する人々の認識が変化していることを意味しているのではないだろうか。次節では，家族関係についての悩みの中でも，とくに夫婦関係と親子関係における悩みをほりさげて，「人生案内」における家族についての悩みの減少と「家族の個人化」がいったい何を意味しているのか検討してみよう。

### (2) 夫婦関係の個人化

家族の個人化について検討するために，人生案内によせられた相談の中から，とくに夫婦関係の悩み相談に対する回答者の語りにも注目する。それは，ある悩みを抱えている相談者の問題を解決したり，相談者の状況を読み解いて何が問題なのかを明らかにしようとしたりする回答の中に望ましい生き方や夫婦関係が透けてみえるためである。それらの回答は読者にも向けられていることからすると，相談者の個別の問題状況をこえて，その時点における一般的な意識を反映しているといえる。

1968年と1978年の「人生案内」において，夫についての悩み相談に対して，回答者たちは妻である相談者に対して「忍耐」をもって，「慰安」を提供する存在であるようにと助言していた。

・「二人の子どもをかかえていまなおご主人を愛し続けているあなたなら，ご主人が別れたくないという限り，当分忍耐と戦ってご覧なさいませ。そのうちには時が解決してくれましょう」（「会社やめてから堕落　離婚した女と関係，遊びも覚える」への回答 福島慶子 1968. 01. 12）
・「あなたは絶対服従だ，どれいだと嘆いておられますが，形の上ではそう見えるけれども，実はその逆で，母親がいなければだだっ子には何もできないというところへひっぱってゆく努力をしてください」（「内づら最低，暴力亭主」への回答 小山いと子 1968. 03. 27）
・「あなたはしっかり者，働き者で〔…〕。これまでのあなたはただなりふりかまわず働き金をためることだけで，妻として家庭内のやすらぎやたのしみ，あたたかさなどをなおざりにしたから，ということではないでしょうか」（「辛苦22年，夫が浮気」への回答 小糸のぶ 1978. 05. 30）
・「ふだんから相手に対する心，気持ち，感情が大いに関係するもの〔…〕それよりもまずあなた自身が〔…〕ご主人への愛情とか尊敬とかについて心静かに思いをめぐらせてみることをおすすめいたします」（「セックス強すぎる夫　拒否すると大荒れ，私は三つ姉女房」への回答 戸川エマ 1978. 09. 01）

これらの回答には，妻が夫に従うものといった封建的な夫婦関係が前提にある。また，現在ならば，夫の DV などと問題視されるような相談であっても，回答者たちは深刻な問題ととらえず，妻として「やすらぎ」「あたたかさ」を提供する役割を相談者に求めていた。

このような夫婦関係を前提とした1970年代頃までの回答者とは異なり，2000年代の回答者たちは，夫婦関係における封建性よりも対等性，自分の気持ちを抑制することよりも，正直な気持ちの自己表現，耐えて沈黙するよりも夫と対話をすることを重視している。

・「おっしゃるように『夫がどうしたいと思っているのか，私と子どもに対してどう考えているか』を夫に問いただすことです。そこからしか何も始まりません。あなたと夫の『いま』と『これから』の問題なのですから」（「結婚20年の夫が浮気」への回答 落合恵子 2003. 11. 17）
・「昔のことを思い出して怒りがこみ上げるのは，その当時，十分に相手にご自分の感情を表現できずに，我慢してしまったためでしょう」（「昔の浮気，夫に再び憎悪」への回答 海原純子 2008. 08. 21）
・「そんな夫と，浮気が繰り返されるであろうことを覚悟の上で，共に暮らすのも一生です。また，夫が新たに，若い女性と関係していることを知り，夜も眠れないほど苦しむくらいなら，離婚してストレスのない人生を送るのも一生です。どちらを選ぶかは，あなたが決めるしかありません〔…〕その決断をするために，ともかく，夫と向き合い，浮気に対するあなたの正直な気持ちをぶつけて，今後のことを真剣に話し合ってみたら」（「夫が浮気　離婚に踏み切れない」への回答 土肥幸代 2013. 12. 10）
・「そういう男には妻の本気を見せるしかない〔…〕この際，泣いたり，わめいたり，お互いが疲れ果てるまで，とことんやりぬいてはいかがでしょう」（「浮気を繰り返す夫」への回答 久田恵 2013. 05. 19）
・「いまだに夫を信用できないのは，あなたが自分の心に真正面から向き合おうとしなかったから。夫に裏切られて傷つかない妻はいません。何よりまず，自分が深い傷を負っていることを知ってください。そして夫に怒りをぶつけ，すべてお見通しであったことをわからせてやりましょう」（「夫が30年前に浮気　今も苦痛」への回答 最相葉月 2014. 07. 27）
・「私には，こうしたらよい，という妙案はありません。あくまで，あなたの気持ち次第です。夫婦のことは夫婦で話し合って解決するしかありません。なぜなら，普通のことと違って，第三者にもうかがいしれぬ微妙な問題だからです」（「夫が部下の女性と密会」への回答 出久根達郎 2014. 04. 08）

これらの回答には自分の「正直」な感情や気持ちを表現することによるコミュニケーション的に対等な夫婦関係が前提あるいは理想とされている。しかし，対等な夫婦関係における率直な感情の表明と水平的なコミュニケーションと同時に「冷静さ」を維持して一人で熟考することも求められている。

・「人生とはかくも怖いものだと実感した中で，夫を捨てて生きるか夫が目覚めるのを待つか，あなた自身の本音の答えを見つけてください」（「夫の不倫に耐えるべきか」への回答 久田恵 2003. 10. 08）
・「あなたが守りたいものは何なのでしょう。家庭ですか〔…〕残念ながら，すでにあなた方夫婦は壊れていますよ。その現実を直視して」（「夫がママ友と不倫」への回答 最相葉月 2013. 07. 16）
・「離婚して実家に帰るという選択は，賢明です。このような状況では，全てを満足させるような解決策はありません。『長男の部活動をあきらめさせる』というマイナス，『子どもたちに妻を責める姿を見せてしまう』というマイナス，どちらかを選ばなければなりません」（「妻が浮気　いつ離婚すべきか」への回答 山田昌弘 2013. 01. 21）
・「まず，再度，夫としっかりと話しあうべきでしょう。夫からどのような言葉が発せられるか，注意深く冷静に聴いてください。心からの謝罪と共にあなたが納得のいく言葉が得られるかも〔…〕逆に，夫を信じられない気持ちが固まってしまうかもしれません。話し合いを重ねることでご自分の考えをまとめ，この先を判断されてはいかがでしょうか」（「海外赴任中の夫が不倫」への回答 大日向雅美 2014. 01. 19）
・「あなたがまず最初にしなければならないのは，まさにあなたがおっしゃっているように事実が『白か黒か』をはっきりさせること。〔…〕決して感情的にならずに，きちんと相手に事実の有無を聞くという態度を貫いてください。夫が逆切れしようが，自分自身は事実を見つめる，という大人の女性としての態度をお持ちになり，対処していくことで次の道が開けてくる」（「夫が浮気？　白黒つけたい」への回答 海原純子 2014. 01. 31）
・「冷静に考えましょう〔…〕夫を介護する身になっても我慢できるだろうか。子どもさんの存在を考え，夫婦で暮らすメリットを取るか。別れるならばきちんと財産分与・年金分割・慰謝料の話し合いをすること。結婚を継続するのだったら，わび状ぐらい取ったほうがいいでしょう〔…〕ことは感情の問題ですが，できるだけ事務的に考えを進めてください」（「夫が浮気　落ち込む60代」への回答 樋口恵子 2015. 08. 03）

かつての「人生案内」の回答者たちは，夫婦関係において「妻は黙って耐える」という封建的な関係を前提に，夫婦間の情緒的な結びつきを重要視していた。それに対して近年の「人生案内」において相談者たちは対等な夫婦関係における率直な感情の表出と水平的なコミュニケーションと同時に，「白か黒か」，「プラス」か「マイナス」かを感情に流されるのではなく，「事務的」に判断することも求められる。すなわち，コミュニケーション的には対等な夫婦関係だが，「あたたかさ」といった情緒性を排したコスト計算をする「冷静」さが求められるようになっているのである。

このように，夫婦関係の問題に対処するにあたって，「あたたかい」家庭を維持するよりも，その家庭の中の夫婦関係を対等にすべく「冷静」に判断すること，相手に対する献身よりも，自分の気持ちにしたがうことが望ましいと語られている。そういう意味で，夫婦関係において，自分の感情だけを考慮し，行為の中心に自己がおかれ，その自己を中心に人生をつくりあげていく「個人化」がみられる。

### (3) 個人化されえない親子関係

戦後まもなく再開された「人生案内」には10代，20代の若年層からの相談が過半数を占め，親に対する悩み相談が多くみられた。1953年 1 月20日から 6 月18日の「人生案内」を分析した加藤秀俊（1953）

によれば，相談を持ちかける人の多くが，ある対人関係における「劣位者」であり，親子関係においては子から親についての相談が大半を占めていた（25件中21件）。つまり，加藤が分析した1950年代の「人生案内」では，封建的な親子関係のもとで「子から親に向けての欲求不満」に基づく相談がほとんどを占めていたのである。

1950年代において「子から親」についての相談が多かったのが，1968年から2015年までをみると，「親から子」についての相談が「子から親」についての相談をほとんどの年で上回っている（図３）。しかし，それは親子関係が逆転し，「劣位者」となった親が子についての悩みをよせているばかりではない。平均寿命の上昇によって，親であり，子である期間がかつてなく長期化し，未婚率の増加からすると，親元から独立しない「子ども」である期間も長期化している中で，親子関係における新たな悩みが生じているように思われる。

まず，今日の親子関係における悩みに垂直的な関係から派生したものはほとんどみられない。それと並行して，回答の方ではとくに義理の親子関係については，親と子という役割関係から離れて一定の距離を確保するように助言するものが多くなっている。

・「ならば，あなたも長男の嫁という役割をいったん棚上げして，ご自分の時間を大切にしてはどうですか」（「義父母がつらくあたる」への回答 最相葉月 2014. 08. 19）
・「夫もあなたを気遣って，実家とは距離をとっていらっしゃるようです。その距離感でいいのではないでしょうか〔…〕つまり近すぎず離れすぎず，という状態を維持してはいかがでしょう」（「陰口など義父母に不信」への回答 海原純子 2014. 12. 16）
・「今，夫のお母様とずっといるのが一番の不満なら，趣味なり友人と交際なり，あなたが外に出て楽しむ時間を作ってはいかがでしょうか」（「しゅうとめと同居に不満」への回答 山田昌弘 2014. 04. 09）
・「家族だからこそ，正直に言えないこともあると思います。これ以上は問い詰めないのが惻隠の情〔…〕しばし距離を置いて付き合うことになるかと思います」（「夫の奨学金返済　義母がうそ」への回答 久田恵 2013. 08. 18）
・「お手紙から，日頃の行き来や電話等での交流もあまりないのではないかと想像されます。それでしたら，これ以上関わらなくても良いのではありませんか。息子や孫という関係にとらわれず，あなたの優しさを受け入れてくれる友人知人との関係を大切にされてはいかがでしょうか」（「気遣っても反応ない嫁」への回答 大日向雅美 2013. 02. 25）
・「いっそ，他人と同居している，と割り切ったらどうでしょう。家族の一員と考えるから，腹が立つのです〔…〕必要な話だけ嫁さんと交わし，それで用が足りるなら十分ではありませんか。あなたが求める理想の嫁は，現代ではめったに見つからないかもしれません」（「同居の嫁が口きかない」への回答 出久根達郎 2014. 10. 12）
・「『もう嫁を卒業したい』というあなたの心からの願いが私の身にしみとおります。嫁いで40年，肝心の夫君が亡くなって７年。それでもお姑さんに気兼ねして，風邪でもゆっくり寝込むことができないなんて〔…〕こんな人生を世の『嫁』に強いてきた日本の伝統は，伝統ではなく因習〔…〕生真面目に生きてきたあなたが周囲から『わがままな女』『悪い嫁』と見られることに耐えられるかどうか〔…〕他人の評価を受け流す覚悟を〔…〕お仕事を続け，趣味にも取り組んでください〔…〕距離を置き，少し時間がたてば，お姑さんへの思いもまた変わるのではないでしょうか」（「60代女性　義母と同居に限界」への回答 樋口恵子 2015. 03. 29）

このように，義理の親子関係においては，「同居のストレスを減らすには，互いにほどよい距離感が必要」（「姑との同居がストレス」への回答 大日向雅美 2014. 05. 21）というように，「嫁」「姑」といった役割関係から脱することが求められている。そうして，自身の趣味や友人関係を充実させ，自分自身

を中心にして人生を構築するような個人化した人生が推奨される。

人々の意識においても現在の親子関係は特に親世代に「子ども離れ」の意識が強くなっている。NHK放送文化研究所（2015）「日本人の意識」調査によると，1973年から2013年の間で，「老後の生き方」として「子供や孫といっしょに，なごやかに暮らす」よりも，「自分の趣味をもち，のんびりと余生を送る」という生き方を選択する割合が増え，とくに，60歳以上の女性において，「子供や孫」と過ごす老後の生き方を選択する人が大幅に減少している[5)]。

しかしながら，子どもから親に対する意識では，逆の傾向がみられる。とくに既婚女性が育児や働きに出る場合のサポートとして，親に頼る意識はひじょうに強い。国立社会保障・人口問題研究所の調査によると，「出産や育児で困ったときの相談」相手として，第1回1993年調査において夫51.2%，親33.9%だったのが，第5回2013年調査では夫37.8%，親46.9%となっている。また，「妻が働きに出るときの子どもの世話」には「公共の機関など」（第5回2013年調査33.8%）より「親」（同42.2%）の支援を受けている場合が多くなっている。つまり，親は子どもや孫から離れて自分の趣味を楽しみたいと希望しても，自分の子（娘）から育児などの支援を期待されているのである。

子どもから支援や手助けを求められる親の悩みが増加しているのは，とくに，2000年代になって，50代以上の「親から子」についての悩み相談が増加していることからもわかる（図4）。その中には，「70代の主婦。娘は2人いますが，半身不随の夫を私1人で介護しています。40代の長女が何かにつけて私を呼びつけ，家事，育児を手伝わせようとするので苦しんでいます」（2013.05.09），「60歳代男性。遠方に住む息子夫婦から2人目の妊娠の知らせを受けました〔…〕上の子のとき，私たち夫婦は2週間ほど手伝いに行きました。けれども今回は体調不良で無理です。それなのに息子は『少し手伝いに来て』と言います」（2008.05.02）など，子どもから孫の世話などの支援を求められるが，自身の体調の問題や親や配偶者の介護が重なって負担が大きいと悩む人がいる。

このように，高齢になった親から子についての悩みの中でも深刻なのが，中高年になった同居する子どもの仕事や結婚に関する相談である。たとえば，70代からの相談のうち，2013年は45件中18件，2014年は35件中13件，2015年は25件中10件が「働かない40代息子」（2013.06.27），「娘の夫 40代で失業中」（2014.03.02），「娘の夫 借金まみれ」（2014.02.25），「部屋に閉じこもる30代次男」（2015.11.11）など中高年になった子に関する悩みである。実際，高齢の親と同居する中高年の子は増加し続けており，2014年の総務省「統計研究研修所」の集計によると，35～44歳人口のうち，親と同居している人は1980年では2.2%（39万人），1990年5.7%（112万人），2000年10.0%（159万人），2010年には16.1%（295万人）と急増し，2014年は16.7%（308万人）を占めている[6)]。

このような同居する中高年の未婚の子の悩みや，親から離れて独立している子からの頼み事について，子の独立を促すという回答はあっても，「割り切った」関係として，距離を保ち，「他人」として扱うようにとする回答はほとんど見当たらない。

また，「子から親」（義父母も含めて）への悩み相談の年代別の推移をみると，1968年と1978年は20代からの相談が最も多いが，1988年以降は30代からの相談が最も多くなっており，40代以上の「子から親」への相談も増加している（図5）。さらに，「子から親」への悩みを義理の親と実の親に対する悩みに分けると，実の親に対する悩み相談の方が多くなっている（図6）。

以上から，今日の親子関係において生じる悩みはかつてのように若年層の子とその親という垂直的な関係においてのみ生じているわけではないといえる。成人し，結婚し，家庭をもち，独立して親から離れて暮らしていても，場合によっては距離を保つことができる義理の親子関係と比べると，実の親子関係は問題が生じても容易に関係を解消したり，距離を

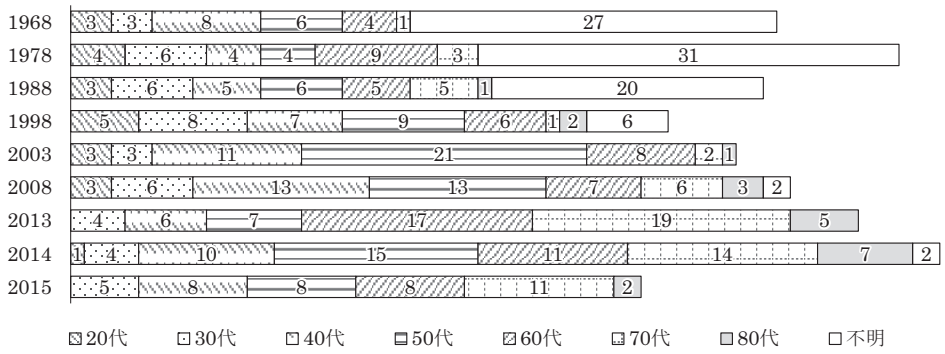


**図４　親から子についての悩み相談件数の推移**

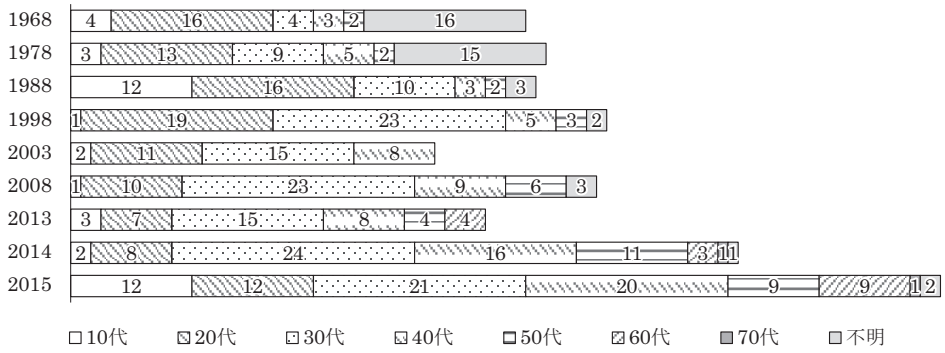


**図５　子から親についての悩み相談件数の推移**

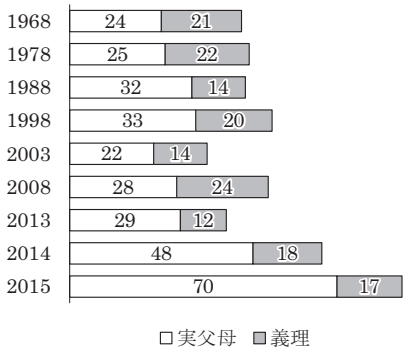


**図６　子から親についての悩み：義理の親か実の親か**

保ったりすることができない。そのため，とくに実の親子の間で生じる葛藤や悩みが長期に渡って続くのである。

お互いが年を重ねても葛藤を抱える高齢の親子関係の間のトラブルや問題をみると，夫婦関係にみられた「個人化」とは異なる様相がみえてくる。とくに，実の親子関係は育児や介護，既婚女性の労働をめぐって，お互いが支援を求めあうか，子が親に支援を求める関係にある。義理の親子関係のように，他人と割り切ったり，「嫁」「姑」といった役割関係にとらわれず，「個人化」した生き方を選択したりしたとしても，育児や介護にまつわる悩みや自身の体調の問題といった悩みは解消されるわけではない。

このような親子関係のあり方はかつての夫婦関係と類似している。1970年代頃まで，夫の問題行動に悩む相談に対して，回答者たちは耐えて，夫婦関係を継続するようにと助言してきた。その頃の女性の就業率は低く，専業主婦世帯が多数派を占めており，妻は夫に扶養される立場にあった[7)]。そのため，夫婦関係は，情緒的であると同時に経済的な扶養－被扶養関係でもあった。そこで，関係を解消すること

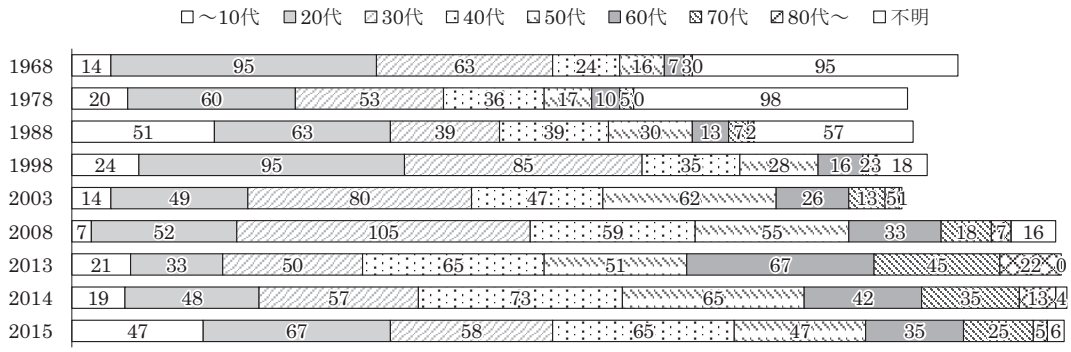


**図７　相談者の年齢分布の推移（件）**

は女性にとって生活の経済的な基盤を失うことを意味していた。

親子関係において，個人化した生き方が当てはまらない悩み相談にはこのような一方的な扶養関係が多くみられる。つまり，役割関係から離れて，自分を中心にして人生を構築するという個人化した生き方は，経済的な扶養関係がなくなった時に選択することができる生き方なのである。問題は「家族の個人化」というよりも，個人化したライフコースに当てはまらない高齢になった親と子がその関係なくしては立ち行かなくなっているという今日の状況ではないだろうか。

## 3　高齢化にともなう相談者の変化

### (1) 相談者の年齢分布の変化

親子の相互依存的な関係なしには生活が厳しくなっている人々の出現の背後には進展する高齢化社会がある。人生案内に掲載された相談者の年齢分布の推移（図７）をみると，相談者が高齢化していることがわかる。まず，1968年と1978年は20代と30代，1988年は10代と20代が多く，1980年代末までは20代を中心とした若年層からの相談が多くを占めていた。それが1998年をみると，10代からの相談は減少し，それ以降，30代からの相談が増加している。また，2000年代以降は，40代以上の相談者が全体のおよそ半数を占め，相談者が高齢化していると同時に，2013年から2015年では相談者の年齢分布が分散するようになっている[8)]。

この相談者の年齢分布と日本の総人口の年齢分布を比較してみると，1988年では相談者に占める20代の割合（21％）が実際の総人口に占める割合（13％）より大きくなっており，60代以上の相談者の割合は実際の総人口に占める割合よりも少なくなっている（図８，図９）。

1998年では，総人口に占める20代（15％）と30代（13％）の割合に対して，相談者の20代（31％）と30代（28％）の占める割合が高くなっている。また，総人口に占める60代以上の割合に対して，60代以上の相談者の比率は低くなっており，人生の後半になると，人生問題についての悩みが少なくなると解釈できる（図10，図11）。

2013年の相談者の年齢分布をみると，60代以上の高齢者からの相談が増加している。2013年の総人口の分布と相談者の年齢分布を比較すると，10代からの相談がきわめて少ないといえる（図12，図13）。

1988年（図８）と1998年（図10）では，20代から30代の相談者が多いことから，その時期に進路決定，就職，結婚など人生の重要なライフイベントにともなう葛藤や悩みが生じるといえる。しかし，2013年の相談者の年齢分布（図12）をみると，50代以上の相談者が半数以上を占めている。つまり，高学歴化や晩婚化・晩産化によって，進路や就職，結婚，出産など重要なライフイベントを20代で経験していた

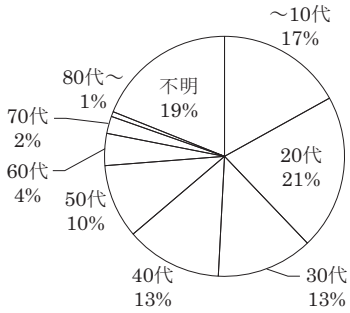


**図 8　1988年相談者の年齢分布**

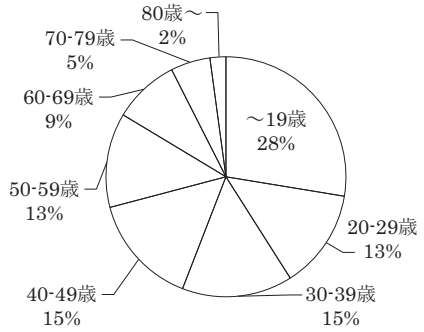


**図 9　1988年総人口の年齢別割合**

出典：「人口推計」（総務省統計局）より作成

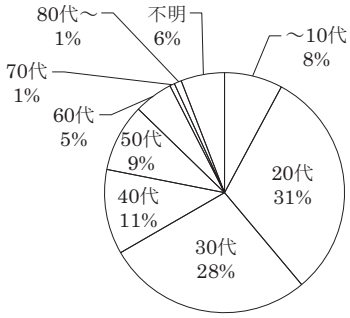


**図10　1998年相談者の年齢分布**

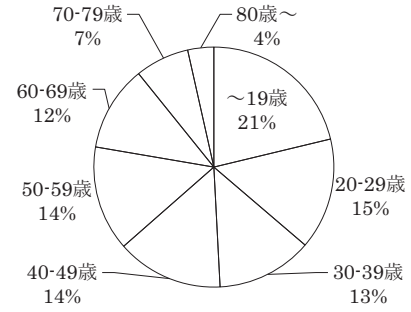


**図11　1998年総人口の年齢別割合**

出典：「人口推計」（総務省統計局）より作成

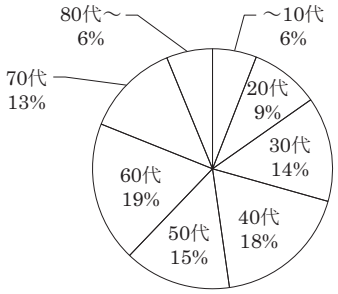


**図12　2013年相談者の年齢分布**

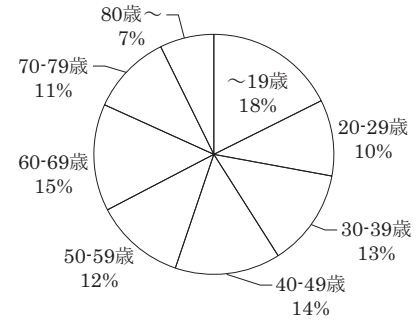


**図13　2013年総人口の年齢別割合**

出典：「人口推計」（総務省統計局）より作成

のが30代で経験するというように，後ろ倒しになっていると考えられる。加えて，人生の後半になっても，葛藤や悩みを抱えて相談する人が多くなっていることから，重要な出来事が20代や30代というライフコースの特定の時期に集中するのではなく，生涯にわたって生じるようになっているといえる。

### (2) 相談者の高齢化にともなう介護問題

相談者の高齢化にともなう「人生案内」の悩み事の内容における大きな変化のひとつとして，介護に関する相談が増加していることがあげられる。1998

年の人生案内において，「病気の母の世話に嫌気」（相談者39歳女性 1998. 05. 14），「手に負えぬ父，どこで面倒」（相談者50代男性 1998. 02. 04）など，相談者が何らかの形で介護にかかわっている相談は11件，1999年は16件みいだすことができた。15年後の2013年は32件，2014年は27件，2015年は35件と大きく増加している。

実際の要介護者数の推移をみると，要支援も含めた要介護認定者数は2000年の256万人から2013年のおよそ584万人と増加の一途をたどっている（厚生労働省「平成25年度介護保険事業状況報告（年報）」より）。高齢者のいる世帯も増加し，1986年において世帯全体に占める65歳以上の者のいる世帯はおよそ26％から，2013年にはおよそ46.7％に上昇している（厚生労働省「平成26年国民生活基礎調査」より）。

このように介護する－介護されるという経験が一握りの人が経験するものではなく，より身近なものへと拡大するなか，人々はどのような意識をもっているのだろうか。

内閣府「平成24年度高齢者の健康に関する意識調査」（調査対象者は全国55歳以上の男女）によると，介護を頼む相手として「配偶者」（55.8％）と「子ども」（55.8％）をあげる人が多い。また，医療機関や福祉施設よりも「自宅で介護してほしい」，配偶者には「自宅で介護を受けさせたい」という人が多い[9)]。さらに，「病気のときや，一人ではできない日常生活に必要な作業について頼れる人」として，「同居の家族・親族」をあげる人がおよそ８割近く，次いで４割弱の人が「別居の家族・親族」と答えている。つまり，介護や頼りにする存在として，多くの人が家族に大きな期待をよせているのである。

介護されたい場所として多くの人が求める「家庭」において，実際に介護を担っているのはほとんどが女性である。厚労省「平成25年国民生活基礎調査の概況」によると，要介護者のうち61.6％が家族と同居しており，その主な介護者の68.7％が女性，50歳以上がおよそ９割を占めている。

しかし，国立社会保障・人口問題研究所「全国家庭動向調査」によると，家庭の中で主な介護の担い手となっている「妻」の側の意識では「年をとった親は子ども夫婦と一緒に暮らすべきだ」という考えに賛成の人は減少し続け，2013年の第５回調査では反対とする人が半数を超えている。さらに，「年老いた親の介護は家族が担うべき」という考えに賛成の人は減少し，反対とする人が４割を超えている。このように，介護する－介護される関係において，双方の意識が乖離していることが，介護をめぐって葛藤や悩みが生じやすい素地となっているといえる。

また，少子高齢化の進展によって子による親の介護は限界がある。厚生労働省「平成25年国民生活基礎調査」によると，要介護者の年齢は75歳以上で８割以上を占めている。その要介護者と同居する主な介護者の年齢も高齢になっており，2013年において60歳以上の介護者が68.6％を占めている。いわゆる「老老介護」は増加し続け，75歳以上同士の介護者と要介護者の割合がおよそ３割にもなっている。さらに，高齢者の単独世帯も増加しており，高齢者人口に占める一人暮らしの人の占める割合は2014年でおよそ25.3％となっている（厚生労働省「平成26年国民生活基礎調査」より）。

高齢者のおよそ４人にひとりが一人暮らしをしているわけだが，国際的な比較の点からみると，日本における高齢者の家族以外の対人関係は乏しいものといわざるを得ない。内閣府「第７回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」（2010年調査，調査対象60歳以上の男女，施設入所者は除く）によると，日本（及び韓国）は「同居の家族以外に頼れる人がいるか」について，「友人」（日本17.2％，韓国18.3％），「近所の人」（日本18.5％，韓国23.1％）をあげる比率がアメリカ（友人44.6％，近所の人23.7％），ドイツ（友人40.7％，近所の人38.2％），スウェーデン（友人34.9％，近所の人26.5％）と比べて低くなっている。また，「頼れる人」が「いない」とする割合もアメリカ10.5％，ドイツ5.4％，スウェーデン9.7％，日本20.3％，韓国20.0％と，頼れる人がいない高齢者の比率が欧米３か国と比べてきわめて高くなっている。

この調査において「家族以外に頼れる人がいる」とする比率が高く，「頼れる人がいない」とする比率が低い欧米３か国の調査対象者は「一緒に暮らしている人はいない」とする比率が高くなっている。日本12.％，韓国21.0％に対して，アメリカ37.5％，ドイツ37.8％，スウェーデン34.1％と，単身世帯の割合が高い国々では「家族以外に頼れる人がいる」割合が高く，「頼れる人がいない」という人は低い。逆に，単身世帯の割合が低い日本および韓国では「頼れる人がいない」という家族以外の対人関係から孤立している人の割合が高く，友人や近所の人と「頼れる」関係を築いていない。つまり，日本および韓国においては，欧米３か国と比較して家族と同居する高齢者が多く，その家族こそが「頼れる」ものとして介護などの福祉の機能を果たすことが期待されているのである。

### (3) 親密圏の悩みとこれからの人生相談

平均寿命が男女ともに現在80歳を超えている現在，だれもが要介護者になりうる。多くの人は家庭で配偶者や子による介護を望んでいるが，意識面からみても，現状からみても，家族による介護だけでは限界にきていると考えられる。当然，制度の拡充が必要とされるが，個人レベルでは家族以外の対人関係の拡大も必要となるのではないだろうか。

家族以外の対人関係について「人生案内」では，友人関係や恋愛関係といった親密な関係で生じる悩みもよせられている。1968年では，恋愛関係に関する悩み相談が多くみられたが，1998年まで減少し，2000年代になって再増加している（図14）。

1968年の人生案内には恋愛関係についての悩みが35件と，相談件数全体の中で一定の割合を占めていた。そのほとんどが20代からの相談で，「深い仲の彼が見合い」（1968. 08. 02），「彼と決着つけたい〔…〕中絶までさせ，逃げるばかり（1968. 08. 09），「昔の彼から電話〔…〕お見合い，婚約して，また迷う」（1968. 06. 07）など，結婚（婚約）と性行為をめぐる悩みが多かった。また，家族などの反対や性道

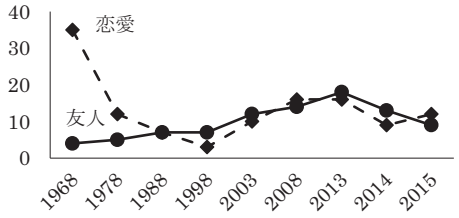


**図14　親密圏の悩み相談件数の推移**

徳などの抑圧から生じる悩みが多かったのが，恋愛や性行為について意識が寛容になり，恋愛という経験が身近なものになったため，現在では恋愛についての悩みは少なくなっている。しかし，2000年代になって，40代以上からの恋愛相談がみられるようになり，現在では，高齢の相談者からも恋愛関係についての悩みがよせられている（表２）。

友人関係から生じる悩みは特に2000年代になって増加している。特徴的なのが，2000年代になって40代から50代の相談者から，親密圏で生じる悩みが登場していることである。さらに，2013年と2014年には，70代からのこれまでみられなかった友人や恋愛関係といった親密圏で生じる悩みが登場している。

恋愛や友人関係の悩みについては従来，若年層から多くよせられていたのが，近年，親密な関係についての悩み相談が中高年にまで広がっていることには，いくつかの理由が考えられる。

第一に，「人生案内」に掲載された悩み事の相談者が全体として高齢化していることがある。若年層，とくに10代からの相談が少ないため，全体としてみると，どのテーマの悩みでも若年者からの相談は少なく，40代以上の相談者からの悩みが多くを占めることになる。

第二に，インフォーマルな社会活動に参加したいとする人々の意欲の高まりと実際の参加率が高くなっているためである。たとえば，平成25年「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」（調査対象者全国の60歳以上の男女）では，「歩こう会」など「健康・スポーツ」，「趣味」などの社会活動に参加したいとする人は全体の７割以上にものぼっている。

**表２　親密圏の悩み 年齢別相談件数の推移**

| | 1968 | | 1978 | | 1988 | | 1998 | | 2003 | | 2008 | | 2013 | | 2014 | | 2015 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 友人 | 恋愛 | 友人 | 恋愛 | 友人 | 恋愛 | 友人 | 恋愛 | 友人 | 恋愛 | 友人 | 恋愛 | 友人 | 恋愛 | 友人 | 恋愛 | 友人 | 恋愛 |
| 10代 | | 4 | 1 | 2 | 2 | | | | 1 | | | | 4 | 1 | 2 | | 1 | |
| 20代 | | 21 | 1 | 5 | | 5 | 1 | 3 | 2 | 2 | 1 | 3 | 1 | | | 2 | 4 | 8 |
| 30代 | | 6 | | 3 | | | 5 | | 2 | 5 | 4 | 8 | 2 | 2 | 1 | 4 | 2 | 2 |
| 40代 | 1 | 3 | | 1 | 1 | 1 | | | 4 | 2 | 5 | 2 | 3 | 1 | 3 | | | 1 |
| 50代 | | | | | | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 | 2 | | 1 | | |
| 60代 | | | | | | | 1 | | | | 2 | 1 | 3 | 5 | 4 | 1 | 1 | 1 |
| 70代 | | | | | | | | | 1 | | 1 | | 4 | 4 | 3 | 1 | | |
| 80代 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 90代 | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| 不明 | 3 | 1 | 3 | 1 | 4 | 1 | | | 1 | | 1 | 1 | | | | | 1 | |
| 総計 | 4 | 35 | 5 | 12 | 7 | 7 | 7 | 3 | 12 | 10 | 14 | 16 | 18 | 16 | 13 | 9 | 8 | 12 |

また，実際にさまざまな社会活動への参加率も上昇しており，参加することで「新しい友人を得ることができた」（48.8%），「生活に充実感ができた」（46.0%）など，ほとんどの人が何らかの満足感を得ている。

このようなインフォーマルな社会活動への参加意欲の高まりを背景に，実際に参加した場合にギャップが生じたり，高齢者の活動空間が家族関係を中心とした家庭から拡大していくなどすると，逆に，これまでになかった悩みや問題に直面する機会も増えることになる。

第三に，中高年になって構築する親密な関係の準拠モデルが不在なためである。これまでドラマや映画や小説などに登場するのは，若年層のカップルが中心であった。そのため，私たちは人生の後半になって，どのような友人関係や恋愛関係を築き上げるのかについてのモデルに不足している。参考にできそうな先行モデルが少ないために，問題や葛藤に直面した際に悩みが生じやすいと考えられる。

以上の理由から，親密な関係についての悩み相談をよせる相談者が高齢化していると考えられる。これからの人生相談は高齢化にともなう介護の悩みとともに，人生の後半になって，どんな友人関係を，どのようなパートナーシップを築いていくかについての悩み相談が増加していくだろう。

## おわりに

本論文では社会の変化とともに人々がどのようなことに悩み，どのような生き方を理想としているのかについて読売新聞で1914年から長期間にわたって継続されている「人生案内」欄から人生相談を分析資料として考察してきた。

1では，読売新聞紙上の「人生案内」に掲載された相談内容を分類し，その内容の変化についてみた。すると，家族についての相談が減少し，自身の性格や進路など自分についての悩み相談が広い年齢層からよせられ，増加していることが明らかとなった。

2において，家族の問題が減少し，自己自身についての悩みが増加している変化をベックの「個人化」概念と照らし合わせて考察した。すると，一見して「家族の個人化」とみえるこの変化は，夫婦関係の悩みが減少していることから生じていると明らかになった。逆に，親子関係についての悩みと回答

からは，役割関係から離れて自己自身を中心に個人化した人生を歩むことができない現代の社会における親子関係の姿が浮かび上がってきた。

３では，個人化しえない親子関係の背景にある少子高齢化社会を反映した相談者の高齢化を確認した。さらに，高齢の相談者からの友人や恋愛関係といった親密な関係についての悩み相談がみられるようになっていることが明らかとなった。それは高齢化の進展とともに，人生の後半になって，どんな友人関係を，どのようなパートナーシップを築いていくかについて考察していかざるを得なくなっていることを示しているのではないだろうか。

これからの人生相談は高齢化にともなう介護の悩みとそれに対する家族の介護負担を社会全体でどのように対処していくのかという問題をつきつけることになるだろう。さらに，今まで悩むことがなかった年を重ねてからの対人関係をどのように新しく築いていくかについての悩みが増えていくと思われる。それは夫婦関係が「クール」になり，他に頼るところがない子を高齢になってもなお心配し続ける長期にわたる親子関係といった疲弊する家族関係とは異なる新しい社会関係を拡大していかざるをえない厳しい現状の反映でもあり，従来の人間関係には不足していた近隣，友人，高齢期におけるパートナーシップといった新しい対人関係をつくりあげていくチャンスでもある。

## 注

1） 読売新聞「人生案内」欄に掲載された相談と回答のうち1968，1978，1988年は読売新聞収縮版より，1998年以降は読売新聞オンラインデータベース「ヨミダス歴史館」から収集した。なお引用の際，漢数字はアラビア数字にあらため，フリガナは省略した。各年には以下の回答者が悩みに答えているが，本文中においてもすべて敬称は省略させていただいた。1968年は大浜英子，木々高太朗，小糸のぶ，小山いと子　戸川エマ，福島慶子，1978年は鍛冶千鶴子，小池のぶ，小山いと子，戸川エマ，沢地久枝，平井富雄，平岩弓枝，1988年は落合恵子，鍛冶千鶴子，早乙女勝元，三枝佐枝子，平井富雄，深沢道子，藤原てい，1998年は大森一樹，落合恵子，鍛治千鶴子，里中満智子，深沢道子，藤原正彦，保崎秀夫，三木善彦，2003年は浅井昌弘，大森一樹，落合恵子，鍛冶千鶴子，出久根達郎，土肥幸代，久田恵，三木善彦，2008年は海原純子，大日向雅美，立松和平，出久根達郎，土肥幸代，増田明美，樋口恵子，久田恵，山田昌弘，2013年，2014年，2015年は海原純子，大日向雅美，最相葉月，出久根達郎，土肥幸代，野村総一郎，樋口恵子，久田恵，増田明美，眉村卓，山田昌弘，鷲田清一。

2） 「人生案内」の投稿規定には「生活上の悩み全般が対象」，「純粋な法律問題や病気・健康の相談などは取り上げません」とある。

3） 太郎丸（1999）は「罪」や「恥」といったいくつかのキーワードによって相談内容をコーディングし，戦後日本の読売新聞「人生案内」欄から，相談内容の「個人主義化」がみられるとも論じている。

4） NHK 放送文化研究所（2015）によると，既婚女性が職業をもつことについて，かつて多数派だった「育児優先」は1973年の42.0％から2013年30.6％，「家庭専念」は1973年の35.2％から2013年には10.6％にまで減少し，対して，「両立」は1973年20.3％から56.3％と多数を占めるようになっている。

5） NHK 放送文化研究所（2015）よると，1973年には「子供や孫といっしょに，なごやかに暮らす」が最も多かったのが，1990年代頃から減少し，2013年調査では26％になっている。逆に「自分の趣味をもち，のんびりと余生を送る」は1990年代頃より増加し，1973年20％から2013年28％となっている。とくに60歳以上の女性で「子供や孫」を選択する人が1973年の65％から2013年31％と大幅に減少している。

6） 総務省統計研究研修所西文彦「親と同居の壮年未婚者2014年」http://www.stat.go.jp/training/2kenkyu/pdf/zuhyou/parasi11.pdf, 2016.2.5

7） たとえば，『男女共同参画白書 平成28年版』によると，1980年において「男性雇用者と無業の妻」という世帯1114万に対して，夫婦共働き世帯は614万世帯と圧倒的に少なかった。なお，共働

き世帯は1990年代末から多数派となり，2015年において「男性雇用者と無業の妻」は687万世帯，夫婦共働き世帯は1114万と逆転している。

8）　とくに2015年では，いったん減少した10代からの相談が多く掲載され，2000年代には減少していた20代からの相談も再び多くなっている。この新しい傾向についてSNSなどの隆盛との関係で考察することは興味深い。

9）　平成24年度「高齢者の健康に関する意識調査」（内閣府）によると，日常生活を送る上で介護が必要になった場合どこで介護を受けたいかとの問いに「自宅で介護してほしい」34.9%が最も多く，次に「病院などの医療機関に入院したい」20.0%，「介護老人福祉施設に入所したい」19.2%，「介護老人保健施設を利用したい」11.8%となっている。また，配偶者が介護の必要な状態になった場合「自宅で介護を受けさせたい」が45.4%と最も多く，「病院などの医療機関に入院させたい」18.5%，「介護老人福祉施設に入所させたい」14.9%となっている。

## 文献リスト


Bauman, Zygmunt 2000 *Liquid Modernity.* Polity（＝2001 森田典正訳『リキッド・モダニティ―液状化する社会』大月書店

―― 2005 *Liquid Life.* Polity.（＝2008 長谷川啓介訳『リキッド・ライフ―現代における生の諸相』大月書店）

―― 2008 *The Art of Life.* Polity（＝2009 橋良輔，開内文乃訳『幸福論――“生きづらい”時代の社会学』作品社

Beck, Ulrich 1986 *Risikogesellschaft auf dem Weg in eine andere Moderne.* Suhrkamp（＝1998 東廉・伊藤美登里訳『危険社会―新しい近代への道』法政大学出版局）

Beck, Ulrich, Anthony Giddens and Scott Lash 1994 *Reflexive Modernization: Politics Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order.* Polity（＝1997 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化―近現代における政治，伝統，美的原理』而立書房）

Giddens, Anthony 1991a *The Consequences of Modernity.* Polity（＝1993 松尾精文，小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か？――モダニティの帰結』而立書房）

―― 1991b *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age.* Stanford Univ Pr.（＝2005 秋吉美都，安藤太郎，筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』ハーベスト社）

加藤秀俊 1953「身上相談の内容分析」思想の科学研究会編『芽』 9 /10: 17-29

中村隆，土屋隆裕，前田忠彦 2015「国民性の研究 第13次全国調査－2013年全国調査－」統計数理研究所 調査研究リポート No.116

NHK放送文化研究所編 2015『現代日本人の意識構造［第八版］』NHK出版

落合恵美子 2014「近代世界の転換と家族変動の論理」『社会学評論』Vol.64（2013-2014）No.4，pp.533-552

太郎丸博 1999「身の上相談記事から見た戦後日本の個人主義化」光華女子大学『変わる社会・変わる生き方』ナカニシヤ出版，pp.69-93

山田昌弘 2014「日本家族のこれから――社会の構造転換が日本家族に与えたインパクト」『社会学評論』Vol.64（2013-2014）No.4，pp.649-662

# Worries about One's Self and Family in an Advice Column : Analyzing the "Jinsei Annai" Advice Column in the *Yomiuri Shimbun*

IKEDA Tomoka [i]

**Abstract** : This thesis analyzes the "Jinsei Annai" advice column from the *Yomiuri Shimbun* in terms of what kind of things people suffer, the way of life that is desired, and whether they are adapting to social change. Worries about family relations have been decreasing and individuals' personal concerns have been increasing between the late 1960's and the 2010's. Analyzing this change based on U. Beck's concept of "individualization", at first glance it seems that this is individualization of family. But by analyzing in detail about family relationship troubles, it turns out that the change is derived from the fact that worry about marital relationships is decreasing. From troubles involving parent-child relationships, it appears that a parent and child in an economically interdependent relationship cannot be individualized. What lies behind this is the aging of society in reality. The aging of real society is also evident in the aging of advice column consultants. Worries about nursing care are increasing and concerns about intimate relationships among the older aged persons that have never previously been addressed are also emerging. It is also a reflection of the harsh reality that we have no choice but to expand interpersonal relationships beyond families, but this can also be an opportunity to expand new social relationships.

**Keywords** : advice column, *Yomiuri Shimbun* "Jinsei Annai", aging society, individualization of the family, marital relationship, parent-child relationship, intimate relationship

i Part-time lecturer in Ritsumeikan University